金城 亀吉 きんじょう かめきち （ 糸満漁協 ）

1931 年(昭和 6 年)、糸満町に生まれる。82 歳(2013 年時)。

糸満が誇る漁は追込である。集団で潜って網に魚を追い込んでいく勇壮な漁である。若い頃から追込で鍛えられ、潮水を多く飲んだという古参の漁師。氏は終戦直後、米軍上陸用舟艇で尖閣諸島に行きダツの追込漁を行った。これを手始めに同島には 7､8 回出漁を体験している。40 代にはハワイに渡り、10 数年間、カツオ漁に従事。米国籍も取得、今は趣味の釣りを楽しみながら悠々自適に暮らし、青年漁師の指導にあたっている。

糸満伝統の追い込み、ダツ、トビウオ獲る

ウチは糸満生まれのウミンチュー(海人)だから、学校卒えると、すぐ漁を手伝わされた。

終戦は、昭和 20 年だから 14 歳、1 年間はして、あの時は全部軍作業だったんですょ。ウチも軍作業に行って、今那覇の旭橋のこっちに大きなパン工場があって、そこで 1 年半位やっていた。この部隊が天願に移動したから辞めて、元の漁師に戻ってすぐシジャー(ダツ)獲りをした。丁度冬だった。ウチらがやる時は、すぐそこの糸満港の地先で獲れた。

昔から糸満は追い込み専門だから、シジャーも、トビウオも追い込みでやりますょ。

あれは、海に大きな袋網を仕掛けていて、皆で遠くから魚を取り囲んで、この網に追い込んで行くから、母船やサバニに乗る人、潜って追い込む人とか、もう相当の人数が、2,30 人は必要です。だから、その時期なると、ウチら追込みシンカ(組仲間)はもう忙しかったですょ、シジャー獲りに尖閣列島に行ったり、トビウオ獲りに波照間辺りに行ったりして。

波照間はねぇ、丁度与那国の方向に、アシジー(浅瀬)がずっと伸びているから、そこに網入れたら、もうトビウオは、１日で１万斤位は獲れよったですょ(笑い)。大体 5,6 回位網入れますから、もう船はすぐ満船しました(笑い)。

ベニヤの上陸用舟艇　近海に　日帰り漁で

終戦直後は、糸満は船は戦争でやられて１隻もなかったです。もう全部、米軍の上陸用舟艇でやってましたから。ＬＣＶＰといって舟艇の一番小さいもの、ベニア板で造られているが、防水されて頑丈だったですょ。それを米軍から漁船に改造したのを貰ったり、また捨てられているのを持ってきて修理して使ったりして(笑い)。カツオ船もそれでやっていた。58 号のカツオ船も。ＶＰはエンジン１個だけ付いて、小さくて、もう船の半分位しかない。だから、あれでは遠くに行けなかったです。それにあの頃は、氷がないから、近くのチービシとか、慶良間のハテ

船は幾らあっても足りない、放置された舟艇を補修して使う。(「沖縄戦後写真史」より)

ジマとかに、日帰りでトビウオ獲りに行きましたねぇ。シジャーは、久米島辺りに、3 隻の舟艇で行って、2 隻で網入れて、1 隻は運搬船にして、1,2 回網入れたら、船のいっぱい獲れました。昼までしたら魚腐らすから、すぐ 1 隻に魚積んで運んで、那覇と行ったり来たりして、もうフル運転ですょ。終戦直後は、近くでもいっぱい獲れよったです。昔からシジャーとかトビウオはスウヌクワ(潮の子)といって、潮の流れがよかったら、いい潮だったら、いっぱい獲れました。あのベニアの木船、ＶＰの舟艇のあとから、今度は鉄船を、エンジン 2 個付いたＬＣＭという大型の上陸用舟艇を改造した漁船が来ました。この頃には、もう氷も積めたから、このM型で、シジャーは尖閣列島に、トビウオは宮古とか、八重山の波照間島とか、遠くに行けるようになりましたねぇ。

久米島・鳥島沖　米軍爆撃演習に遭う

一遍は終戦の翌年だったか、久米島の鳥島があるねぇ、あっちの沖でシジャー獲りやった。米軍の爆撃演習場所と分かりながら、皆でシジャーを追込んで、2 隻のＶＰの舟艇で綱引っ張っていたら、音もしないでょ、米軍の飛行機が来てから、いきなり爆弾が落ちてきたですょ(笑い)。綱引っ張っている真ん中に、すぐ落ちて(笑い)。

一人の船長はもう頑固でねぇ、必ずやる、このまま漁を続けると言って、もう一人の船長は臆病さぁ、止めて、もう逃げるといって(笑い)。そうこうしているうちに飛行機が下がってきてょ、「避けなさい、ここから離れなさい」と言ったから、もう離れたけど。

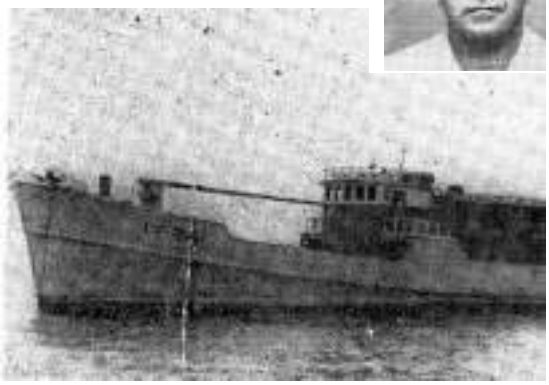
あの時は、鳥島は緑がいっぱいあったです。今テレビから見ると砂っぽくなって木一本もないけど、昔は緑がいっぱいでしたょ。向こうに壕があります。隠れるガマ(洞窟)があって、糸満の連中は、嘉手納辺りから艦砲の弾を取ってきて、信管を外して中の火薬を採って、これでダイナマイトで使っておった。向こうに持って行って、誰がも分からんからといって、壕の中でよう外していた。

カマーヤッピーさんねぇ(笑い)。もう亡くなったけど。あの人は、壕の中で、もう一生懸命火薬を採るといって、火薬はあれから 10 斤位は採れる、ウチもやってみたが、もう怖くてできなかったですょ(笑い)。外では、飛行機が、バンバン爆撃演習しているがねぇ、壕の中では、もうこの人汗だくで、一生懸命火薬とりに熱中、外ではバンナイ(続けざまに)爆弾が落ちているょ(笑い)。もう終戦直後は皆こんな、もう何でもかんでもやらんと、飯は食えなかったからねぇ(笑い)。

尖閣へ初のダツ漁　沈引揚船・第二栄丸で

糸満で最初に、尖閣列島にダツ獲りに行ったのは、大城組(大城漁業団)の第二栄丸です。上陸用舟艇でなく和船で行ったんですょ、終戦直後は、漁船は全部舟艇だった、和船はこの船一隻しかなかった。これは戦前からの船、テグリ船だったです。糸満のこっちは全部海だったから、向こうの地先の入口に丁度船たまりがあって、そこに係留したおったら、空襲でやられてしまった。そのままずっと沈んでおったのを、終戦直後後、大城武徳(良則)さんが

引き揚げたんです。武徳さんは組合長もやった人ですょ。エンジンはやっぱし海水にずっと入っていたら、空気に触れなかったら、サビ１つしてないらしいですょ。太陽に当たらず、海底の泥の中にずっと埋まっていたら、いつまでも置けるんだって。南方から帰って来た焼玉エンジンの専門がいたょ。沈んだ船を引き揚げて、エンジンも直して、また船体を修理したんですょ。あれは 50 ﾄﾝ位あって、かなり大きな船だった。この栄丸で、尖閣列島に行ってダツ漁を初めたんです。玉城礼次郎さんとか、ウシーヤッピー上原信吉さんとかが船長、機関長して、向こうで。ウチが 16 歳(1947 年)の頃かなぁ。



戦後、尖閣にダツ漁に行った第二栄丸(50 ﾄﾝ)
上は船主・大城武徳氏(糸満町漁業組合長歴任)
(「現在糸満實業人銘々傳」より)

もう尖閣列島に行ったら、行く度に大漁続き、満船して帰ってきた。あの時 4 万斤、5 万斤は積んできたというから。今のｷﾛ数になおせば、24 ﾄﾝから 30 ﾄﾝ位になる。向こうではこんなにダツが獲れたんですょ。そのあと栄丸は、長崎県に追い込みを教えに行ってから、沖縄に帰る途中に台風に遭って、鹿児島沖で沈没してしまったらしい。もう皆糸満の人達が乗っていたから大部亡くなっています。

追い込みのおどし縄、慶良間・久高産の、クバの新芽

シジャーの追い込みは、母船２隻とサバニで行うが、海に大きな網を、袋網を仕掛けていて、皆で遠くから魚を取り囲んで行く、母船 2 隻は左右に分かれてスルヂナ(おどし縄)を引っ張って行く。サバニに網を乗せて脇から付いている。潜りの人はこのスルヂナと一緒に泳ぎながら、それで魚を、おどしながら、(袋)網の中に追込んで行く。縄の先にクバの葉の新芽をくびってねぇ、未だ青くならんうちに新芽真っ直ぐなっている。これだったらねぇ、海の中で白くなってピカピカした光で魚は驚くから。また魚を取り囲む縄にも 1 ﾒｰﾄﾙ、2 ﾒｰﾄﾙ間隔位でくびっているから、外へ出ようとする魚は、海水をパンパン叩いて逃がさない。もう魚は全部、袋網の方へ追い込んで行ったら、2 隻のサバニ同志はロープ投げて、袋網を両方から引っ張って、網を閉めていけば、網の中は、もうシジャーでいっぱい(笑い)。こんなして獲りよった。トビウオも全く同じやり方ですょ。で、あのクバの新芽は、慶良間の黒島にもあるし、阿嘉に、座間味の全部に、クバがありますょ。また久高島の東側にも。ウチらが尖閣列島に行ってシジャー獲った時は、クバシマにクバがいっぱいあったが、こっち(沖縄本島付近)で採って、慶良間から採って持って行った。新芽はキラキラ光って、葉が開いたらもうダメ、新芽を切ったら、すぐ氷に入れていたら、大体 2,3 週間は保ちますから。

上陸用舟艇・M型を改造　尖閣へ　ダツ漁

ウチが、尖閣列島に最初に行ったのは 21 歳だから、昭和 27 年(1952 年)位ですねぇ。

当時こっちには、シジャー獲る組が、4､5 組位の網元が、糸満にあったんです。それで一応連れられて行って、あの時は、大型の上陸用舟艇で、鉄船で行きましたょ。舟艇 2 隻で、それに 30 名ほどのシンカ(組仲間)で。舟艇は、ほんとの漁船でないから何丸とかいう船名は付けないです。大きさですか、今の 10ﾄﾝ位の漁船を横に 3 隻並べた大きさかなぁ、幅は 10 ﾒｰﾄﾙ位あったかもしれん。長さはあれよりずっと大きかった。舟艇は戦車も積むから、戦車の歯が掛かるようギザギザが付いているょ、前の方は扉になって、この扉の所はきちんと切って、絶対開かないように溶接して、上にデッキも張って、氷施設も造って、漁船に改造してねぇ(笑い)。だけど部屋は小さいし、年寄りの連中が部屋にいて、ウチら若いのは、台所の薪入れる所、あの時分はドラム缶 2 つに切ってカマドにして、また薪は焚いても燃えないから、石油かけて、もう煙で真っ黒く汚れて、そんな所で寝起きして(笑い)。

米軍上陸用舟艇、このＬＣＭ型を漁船に改造した。
(「水産だより 37 号 1966」より)

あの時は尖閣に行くに、大体 2 昼夜(48 時間)位かかったですょ。糸満から出て、大体久米島の方に行って、クミアカ(大正島、赤尾嶼)の傍を通って、クバシマ(魚釣島)に行くから。普通の漁船なら 30 時間位で行けるけど、舟艇は、先は箱みたいに四角だから、遅くなって、あんなにかかった(笑い)。その代わり、向うは、潮が速くて、波が荒い所だけど、箱型だから、今の和船型より横には強かったです。向かい風になったら、もう風下とか、横とかには安定しておるから(笑い)。

クバシマ付近中心に　ダツ漁　もう満船して

あの時は、シジャーの綱曳くから、舟艇 2 隻で、サバニは 3 隻を横に積んで行ったですょ。人数は大体 30 名位かなぁ、追込みだからもっといたかもしれん。11 月から 12 月頃に行って、1 週間から 10 日位、冬だったから、シケてできない場合もあったから。

ウチはどの辺でやったか憶えています。(海図で示しながら)、クバシマ付近を中心に、こっちに網入れてねぇ、またこの辺に潮から頭出したり引込んだりする所があります、(飛瀬か？)、こっちでも多く獲ったですねぇ、そっちにも小さい岩があって、北の小岩か、この辺でもよく獲れましたょ。この切り立った岩島、クミアカかねぇ。ウチなんかは、こっちではやらなかったです。別の人がやっておった、糸満の人が。こっちは小さな島だから、2､3 回やったら、すぐ終わる。シジャーの網は大きい、片方で 700 から 800 ﾒｰﾄﾙ、両方のあれだった 1300 から 1500 ﾒｰﾄﾙはあるから。もう長い縄を 30 分も曳いたら 3 回位しかできな

いですょ(笑い)。クミアカで獲れた思うけど。ウチなんかは、こっちでやってみないから、どの位揚げたか分からない。尖閣では相当獲れました。大漁しましたょ、舟艇のいっぱい満船して帰ってきましたから(笑い)。

トリシマに上がり　鳥殺して　持ってきた

あの時、トィジー(鳥島：南小島の意)グワー(接尾、愛称)には上がりました、鳥採るために。向こうにはアホウドリ(カツオドリの意)ねぇ、バカドリといって、ものすごくおったですょ。山に登ったら、山いっぱいトビウオです。親鳥が海から捕って来て、ヒナに上げるといってねぇ、ずっと上まで、もうトビウオでしたねぇ(笑い)。あの時は、尖閣には、シジャーも、トビウオも、いっぱいいましたねぇ。ウチらは、鳥を採るため山に登っていったが、あれは採りやすいさぁ。もう上から見たらすぐ飛んで逃げていくから、遠回りして、下から上がって行ったら、もう 10 ﾒｰﾄﾙ先から見ているょ。すぐには飛びきれない、コッコ、コッコして。それを 1 ﾒｰﾄﾙ位の棒で打つと、すぐ倒れるから、これを殺して、山の上から投げたら、コロコロコロと下の所まで落ちて来るさぁ。この鳥を何百匹も採ってから、氷漬けにして、家に持ってきた。あの時はアメリカのソーセイジとか肉の缶詰とか、皆あんなものしかない、生肉なんかないから、(笑い)。卵もこんなに大きかった。ニワトリの卵の 2､3 倍はあったかなぁ。あれもいっぱい持ってきたですょ(笑い)。

洞窟に一人住み　鳥の羽毛　採っていた

トィイジーグワーに、人が住んでいましたねぇ。すぐ海の傍らに、ちょっと自然壕見たいのがある。あそこのガマ(洞窟)に、水が岩から滲み流れる位の所に。あそこに、男の人が一人で住んでおったんです。もう色もマックール(真っ黒く)して、顔は髭ボウボウしていたから、歳ははっきり分からん、4､50 代位だったはず。話を聞いたら、自分は元々糸満の人で、八重山に渡って、八重山からここに来たと言っていた。名前は憶えていない。ここに一人で棲んでいて、ここで鳥の羽毛を採っていて、それを八重山に送っていると。

ここには、船も何もないょ(笑い)。もう連絡は、無線も何もないから、あっちで日にちを見て、大体もう今頃は、羽毛はたまっているだろうといって、八重山から船が来て、羽毛を積んで持ち帰って、代わりに食料を置いていく。この人は、またここで、羽毛を採っておいて、船が来たら、それを持ち帰って、また食料を置いていって。これの繰り返し、繰り返しで仕事していると言っていた。あんな所に一人でいるんだから、もう大変ですょ。怖くて普通の人ならできないさぁ(笑い)。

あの頃は、鳥の羽毛といったら、羽根布団なんかに使う高級だから、相当利益があったはずですょ。島に一人でこもってやる位だから、魚なんか獲るよりも、もう相当儲けがないとできない。あれは誰でもできるワザ(仕事)じゃないから。そうです、ウチも、尖閣列島で、昔は、鳥の羽毛採っていたという話を聞いたことあります。だけど、終戦直後に、島に一人でおって、羽毛を採っていたんだから、あの人に遇った時は、ホントにびっくりしたねぇ(笑

い)。あの人ですか、もう 60 年余り前のことですから、あの時で 4､50 はなっていたから、もう亡くなっていますょ。

多数の舟艇・艦船　海岸に放置　部品取り放題

ウチは、尖閣には、組合を 3 回位替えて行ったです。合計 7,8 回位は行ってますねぇ。大体がシジヤー獲りに、もうあっちに行けば、シジャーはいっぱい獲れましたから。

一度は、泡瀬に米軍の工作隊の本部があって、そこの上陸用舟艇から、尖閣にも行ったです。その時はダイナマイト漁しにですょ(笑い)。

獲った魚は、全部泡瀬に降ろして。この仕事ですか、あっちから請けた仕事なのか分からんが、船も、燃料の油も、工作隊が全部出して、ウチら糸満の連中だけで行きました。獲った魚は、工作隊に全部納めてねぇ。

あの時は、泡瀬の海岸には、舟艇とか、艦船とか、もう船がいっぱい上り揚げてましたねぇ。船体がセメントでできた船もあった。千㌧級で大きかった。ひょっとしたら冷凍船だったか？、もう海岸一帯は、いろんな船が転がっていて、全部捨てている状態だった。アメリカは、台風なんかで打ち揚げられたら、修理も何もしない、もう放ったらかしたまま(笑い)。エンジンの部品とか、船の備品とか使えるものはいっぱいありましたょ。それを自分達で、外して、糸満に持って行って(笑い)。工作隊が、泡瀬一帯を管理していたか分からんが、海岸に乗り揚げている船から、何もかも取っても、何でもなかったですょ。自由に取ることができよった。何でも取り放題でしたから、(笑い)。糸満の人は、これで船修理したり、船造ったりして、相当助かりました。あの時ですか、まだ 19 か、昭和 25 年(1950 年)位ですかねぇ。

台風で座礁して放置されている米軍舟艇・艦船
(1945 年リビー台風による被害)
(沖縄県公文書館)

魚釣島周り　泳いで　ダイナマイト漁

この工作隊の舟艇で、尖閣に行ったですょ、目的はダイナマイト漁だったから、1 隻で行きました。今の魚釣島の周囲を、4､5 名で殆んど泳ぎ廻りました。泳いで魚いる所を探して、ダイナマイト入れんといかんから。あの時はフカが多かったですねぇ。深い所は危ないからといって、わざと波の傍から、陸にくっ付いて、泳ぎ廻って。ダイナマイトは、何回入れたか、憶えていないが、相当入れましたょ。もうあっちこっちに入れて、相当獲れましたから(笑い)。シチュー(オキナメジナ)といって、ちょっと黒くて丸い奴、あれが主に獲れよった。島の縁で入れたから、これしか獲れない(笑い)。

小さな瀬の所では、アーラの百㌔位の大きいものが獲れた。あれはダイナマイト入れたらすぐ浮いてきましたょ、胃袋が大きいからねぇ。ブダイとかも、少し獲れたが、底魚はあま

りいなかった。

フカはものすごく大きな奴がいました。ダツ漁の時はあんまり見なかったけど、その時は、5ﾒｰﾄﾙあるのがザラにいましたねぇ。ダイナマイト入れると、相当魚が浮いて、それを食べに、フカが集まって来るから、大きな奴を釣りました。もう 5 百㌔位もある大きなものを、2 匹も。タイガーシャークというんですか、人食いサメを捕りましたょ。

あの時、クバシマの周辺を泳いでいたら、丁度、伝馬船が通る位に岩を削ってあって、中まで入れるようになっていた。その上を見たら、立派に石垣積まれてあるわけさぁ。

家はないが、先輩達が昔のカツオ製造工場の跡だと言うていた。昔はこのクバシマ近くにカツオも沢山いたんだろう。あんな所に製造工場を造っているから、島の傍で採って、すぐ加工できるようにしてあったですねぇ。

追込み旅漁、宮古へ グルクン　尖閣へ ムロアジ

アギヤー(追込み)で、尖閣に行ったこともありますょ。2 ヶ月間のアギャーアッチ(旅漁)で(笑い)。最初はグルクン(タカサゴ)獲りに宮古に行きました。宮古はアギヤーのいい所、八重ビシといってグルクンのいる所がありますから。糸満の大型船で行ったですょ。

船長はイシクエースー(屋号)といって、船の名前は忘れたねぇ。アギヤーサー(追込み集団)だから、サバニも積んで、60ﾄﾝ位の大きな船だったが、焼玉エンジンで、速度は遅かったですねぇ。宮古には、ユカエーサー(魚運搬船)と 2 艘で行きました。八重ビシに着いて、そこで何回かアギヤーして、グルクンを獲りましたょ。それを運搬船で糸満に運んで行って、また皆の食料を積んでこっちに戻ってきます。だけど、あの時は運搬船も待たないで、すぐに尖閣に行きましたねぇ(笑い)。こっちで、グルクンはそんなに獲れないからと、自分達だけですぐ行ったですょ。それに 1 ヶ月位前に、あの第二栄丸の連中が、尖閣に行って、相当ムロアジを獲ってきた話をしておった。それを聞いていたもんだから(笑い)。

南小島と北小島の近くで、島の縁で、大体 17､8 尋というから、20ﾒｰﾄﾙから 25ﾒｰﾄﾙ位の所で、ダイナマイトを入れたら、もうムロアジが、足がこんなに入る位、もう下にいっぱい沈んでいて、潜って、タモですくって、交代交代で、引き揚げて、相当獲った話をしていたから。今度は、このムロアジを、アギヤーしに。

もう運搬船待てないからと、尖閣へすぐ行きましたょ(笑い)。だけど、あっちに行ったら、どこにもいなかった(笑い)。あれは小さいもんだから、大きな魚に狙われていて、弱いから群れなって、いつも塊っているんですょ。いる時は、もう千斤も、二千斤もすぐ獲れるが、ウチら行った時はいなかったです。そうしているうちに食料もだんだん切れたもんだから、今度はトリシマに上がって、鳥ばっかし捕って食べましたねぇ(笑い)。

トリシマの下で、昔の大きな鍋、シンメーナービといってあるでしょう。ドラム缶半分切って、それでカマド造って、あの鍋で鳥をいっぱい炊いて、食べてねぇ(笑い)。あの当時のアギヤーといったら、人数も多いです。30 名から 40 名位いましたから、もうお腹もすくし、さんざんアワレ(難儀)しましたねぇ(笑い)。

アジンコーから 与那国へ　西表船浮で グルクン追込

そしたら、台湾の近くのアジンコーにですょ。あっちならムロアジがいっぱいいるはずだからいって、尖閣から、今度はあっちに行ったです(笑い)。丁度、夕方船出して、アジンコーには、朝早く着いた。あっちは山なっていて、下は小さな桟橋があるわけ、ウチ達の船は桟橋のそこまで来たら、上の方から竿担いだ人が来るもんだから、兵隊さんが鉄砲持って下りて来たと思って、もう皆びっくりしました。もうこっちは危ないからと、急いでそこから逃げていって(笑い)。折角、アジンコーまで行ったが、あっちに台湾の軍隊がおるから、漁はできないからといって、すぐ与那国に向かいました(笑い)。

もう与那国に行ったら、丁度あの時は糸満からの密航船がいっぱいしておったですょ。密貿易が盛んな時だったから、もう糸満の連中がいっぱい。上陸したら、もう皆知っておる人達だった(笑い)。糸満から、アメリカの物資持って行って、向こうの台湾船と物々交換して。あの当時与那国は人は溢れる位おって、密貿易の船で相当賑わっていた。

で、与那国で食料を積んで、そこから西表の船浮に行きましたねぇ。船浮の西、鳩間島の所はグルクンのいる所だから、こっちはアギヤーの立派なヒシがあるから、こっちでグルクンを獲って。何ﾄﾝ獲ったか覚えていないが、相当獲りました。

こっちで、いっぱい獲ったもんだから、糸満にやっと帰って来れました(笑い)。

このアギヤーアッチ(追込み漁歩き・漁旅)は、大体 2 ヶ月かかっていましたねぇ。

この時にはウチは 23 まではならない。ウチは帰って来たら、一応この仕事もう辞めました。そのあと、皆は船浮にまたグルクンアギヤーしに行ったらしい。2 航海目には、同級生 1 人が亡くなった。アギヤーする時は、スルシカーといってオモリを持ってねぇ、深い所で、魚追い立てるからカンカンカンして、クバの新芽を付けてねぇ、全部並んで、20 ﾒｰﾄﾙ、25 ﾒｰﾄﾙ位の所から、そのスルシカーが石にひっかかって、皆はもう前に進んでいくでしょう、この人はこれを外そう、外そうとして、溺れて死んでしまったと、行った連中が話していましたねぇ。

密貿易で香港へ　40 にハワイへ　カツオ船の仕事

ウチはその後、闇船に乗って、香港にも行ったです。香港商売、こっちから薬きょう持って行って、全部、糸満はこれで栄えたのに(笑い)。ウチはあの頃未だ 23,4 だから、荷主になる位の力はなかった。船乗りで行ったですょ。あの時は、香港行ったら 1 航海で家が建つ、20 日ウェーキー(長者)と言ってましたねぇ、ウチの場合は、往復で 16 日かかって 5 万円(米軍票Ｂ円)儲けてきたょ(笑い)。そのあとは、内地ルートの闇船に乗ったり、新南群島に貝殻採りに行ったり、またノースボルネオで 3 ヵ年間仕事したりして、そして 45 の歳(1976 年)には、ハワイに行きました。向こうでカツオ船に乗るために、糸満から 100 人位は行っておった。カツオの一本釣。向こうのハワイアン・トーナーパーカーといって漁業会社に、そこで 15 ヵ年仕事してました。だから、ウチが尖閣行ったのは、23 歳まで、あの 2 ヶ月間のアギヤーアッチが最後です。

安いすり身に押され　ダツ・トビウオ追込み漁　衰退

ウチは、その時、尖閣には 3 つ組合替わって行って、合計で、7、8 回は尖閣には行ったが、殆んどがシジャー獲りで行きましたねぇ。もう向こう行ったら、いつも船のいっぱい獲ってきた。大体 1 週間から 10 日位かけてねぇ。あの頃はシジャーも、トビウオも、いっぱいおったです、近海の魚も。あれがカマボコのいい材料だった。大量に獲れたし、今のように内地から、すり身なんかは全然ないから、あれを捌いて、カマボコを作っておった。

糸満にカマボコ屋が相当あってねぇ、女の人達が夜中の 2、3 時から起きて、魚の背を開いて、スプーンで全部身をとって、臼で混ぜて、カマボコ作っておったですょ、生の魚だから、ホントに美味しかった(笑い)。あの当時、ウチらが糸満に帰って来たら、獲った魚は、すぐ船の前で、一人何百斤、何百斤と計算して、銘々にその場で渡して、全部自分達で魚をカマボコ屋に売ってましたから(笑い)。

復帰してから、内地から、冷凍物のすり身が入ってきたでしょう。あれは値段が安くて保存が利いて便利だから。だから、もうシジャーやトビウオなんかは売れないです。金にならない。もうその頃からは、追込みやる人も段々少なくなって、規模も小さくなってねぇ。最後までやっていたのは、ウシーアッピー上原清吉さんとか、平安名栄照ヤッチーさん達。もうこの人達が辞めたら、糸満から、尖閣へ追込みで誰もいなくなったですねぇ。

マチ釣り専門、底立延縄船　尖閣行き出した

ウチがハワイから帰ってきたのが 1986 年、その頃には、糸満で、マチ釣り船が相当出てきてましたねぇ。尖閣には、マチ類専門のスクフェーナ(底立延縄)が行ってました。

最盛期には、糸満には 20、30 隻はいましたかねぇ。

だが、それも段々少なくなって来て、今は上原常太郎さんの常丸(7.27 ﾄﾝ)とか、金城芳雄さんの兼市丸とか、4,5 隻位しか行かなくなっていました。

常太郎さんは、クバシマ（魚釣島）に行っているが、最近はあんまり行かないみたい、今は中国の監視船がいるから。その前は、ずっと中国の底曳き船がいっぱい来てからに、もう怖くて仕事できなくて困っていると言ってましたょ。

ウチは、尖閣には、60 年前に 7,8 回行ったが、その時は台湾船もきておったが、だけど、中国船は来なかった。中国船を見たというの話は聞いたこともない。それが日本復帰の前に、石油が出ると分かったから、急に中国は、尖閣は自分達のものと言い出している。また魚もいっぱいいると分かったから、中国漁船が押しかけて来て、自分達の海みたいにドンドン魚を獲っているさぁ。話聞けば、もう大変ですょ。来るのは中国の縄船、あの底曳き船というから。あれが来たら、底から網を曳いて歩くから、小さい魚も、大きい魚も、何でも、全部獲られる、もう根こそぎですょ。

それに魚の棲家、サンゴ礁のヤナまで壊してしまうから。それに船団組んで、相当な隻数来ているというし、常太郎さんの話だと、もう 10、20 年前からだというし、このままでは尖閣の海は荒らされて、魚は確実に全滅ですょ。

尖閣以外　いい漁場ない　政府は　ちゃんと守ってほしい

ウチが、南シナ海、南沙諸島に高瀬貝採りに行った時、驚きましたねぇ。バシー海峡から香港に行く時、皆トロール船ょ、ジャンク船で底曳き船だった。中国大陸がこうあったら、こっちから越したらねぇ、海は濁っているですょ、こっちから向こう側は全部茶色がかって、だから下は全部泥、こっちみたい青くない、泥だから。

もうあれ見たら、中国大陸近くの海と比べたらねぇ、尖閣以外にいい漁場はないですょ。中国のどこにもないはずです。だから、中国は、尖閣列島は、自分達のものだと言い出して、島も、海も、魚を、魚も強引に盗りに来ているから。

日本と中国が主張している中間線、中国は沖縄ぎりぎり近くまで主張し、漁民にとって死活問題である。

(日中両国が主張する境界線図を指して)、中国に尖閣列島を盗られたら、もうお終いです。もう中国はドンドン、こっちまで、この沖縄の近くまで、攻めてくるから。中国は、この沖縄トラフのところまで、宮古・八重山ギリギリの所まで、自分達の海といって、境界線を主張している。中国大陸の大陸棚は沖縄トラフ延びている、延長しているから、そこまで自分達のものと言っている。また、南シナ海も、自分達のものといい張って、ベトナムやフィリピンとかと争っているが、だけど、向うは中国の大陸棚じゃないさぁ。中国から相当離れている(笑い)。だから、中国は最近はこの大陸棚延長という考えは言わなくなっている。南シナ海では不利になるから（笑い)。その代わり昔から中国領土だったの一点張りになって(笑い)。だけど、中国に尖閣盗られたら、あっちに軍事基地造って、沖縄トラフまで自分の海だと言って、近海で漁する漁船は拿捕するし、中国漁船がワッーと押しかけてきますょ。そうなったらもう大変です。沖縄の漁民はどこで漁しますか。

これは、沖縄だけの問題じゃない、もう日本全体の問題ですょ。だから、政府は、尖閣の島も、海も、魚も、中国に盗られんように、ちゃんと守ってほしいですねぇ。

(了)

金城 清信 きんじょう きよのぶ （ 糸満漁協 ）

1936 年(昭和 11 年)、糸満町に生まれる。77 歳(2013 年時)。

1955 年 19～21 歳の 3 ヵ年間、尖閣諸島にダツ追込みに行く。

1957 年、21～22 歳の 2 ヵ年間、東シナ海で、サバ漁を行う。

以後、12 年間、マグロ船に乗り、沖縄・八重山近海からフィリピン沖で、マグロ延縄漁に従事する。氏は尖閣諸島でダツ漁に従事し、色んな体験談を披瀝している、その 1 つに糸満漁師が台湾漁民に同漁法を教えたが、ダツが向かってくるから、驚いて逃げ去って、ダツは獲れないょと失敗譚もその 1 つである。

19～21 歳　尖閣でシジヤー獲り　追込み 40 名で

ウチは、19 の歳(昭和 30 年.1955 年)に、シジャー(ダツ)獲りに行かないかと誘われた。あの時は追込みやっていたから。行くさぁと、小使い儲けに、それで尖閣に行きましたょ。

それから 20、21 と 3 ヵ年間行ったですょ。19 の時はタルマヤー(屋号)玉城テイギの 15 ﾄﾝの船 3 隻で、船の名前はシンヨー丸？(15 ﾄﾝ)、セイトク丸(10 ﾄﾝ)、もう 1 つは憶えていない。船主は玉城テイギさん、20 の時はまたタルマヤーの船、21 の時その人の弟が替わった。テイギさんはやめたらこの弟がやってましたょ。3 ヵ年親方は 3 名とも違っていますょ。

追込みアギヤーで、宮古に行く時は、八重ビシに行ってよくやりおった、グルクン追込みに。その時は、アギヤーシンカ(組仲間)は大体 80 名位。だけど、尖閣にシジャー獲りだったら 40 名位で行きました。あの時は、本船 3 隻、ロープ引っ張る 2 隻と、氷積んでこれに獲った魚を積んで沖縄へ航海する船と合わせて、全部で 3 隻で行きましたょ。それにサバニを 3 隻積んで、1 隻は袋網に乗せるアミブニ(網舟)、その網は半分ずつ分けて入れるからワキブニ(脇舟)と、魚を運搬するカランニグワー(空き舟)を積んで行きました。

尖閣に行く時は、こっちから久米島ヌイテ、アコウ(赤尾嶼・大正島)を通って行くんですょ。あの時の船はあまり走らんから久米島まで 8 時間はかかった。そこからアコウに行って、尖閣列島行ったです。シジャー獲りは、大体が旧 10 月から旧正までの 3 ヶ月間、寒い冬の時期です。

最初ひと網で 15 ﾄﾝ　船のいっぱい　獲れた

追込みアギャーは、グルクン(タカサゴ)なら宮古の八重ビシ、トブー(トビウオ)なら八重山の波照間、シジャーだと尖閣列島と大体決まってました。もう尖閣列島では、シジャーは相当獲れました。最初のうちは、アラウミ(新海)だから、ひと網で、もういっぱい獲れて、大漁しましたょ。その時は、魚はサバニに乗せないで、運搬船を直接(袋)網に寄せ着けて、魚は全部船に揚げて乗せました。袋網の中に、シジャーを追い込んで、どの位獲れたかは、櫂を真ん中を突っ込んで立てて、網の底に届くかどうかで分かります。届かなければ、サバニに乗らない位いっぱい獲れているから(笑い)。その時はすぐ運搬船に積み込んで、そのま

ま糸満に運んで行きましたねぇ。ウチらアギヤーの仕事は、もうそれで終わり。

魚獲っても、船も、氷もないから(笑い)。運搬船が糸満と尖閣列島を往復するの 10 日間位はかかっていたかなぁ。はっきり憶えてない、それまでユクティ(休憩して)います。

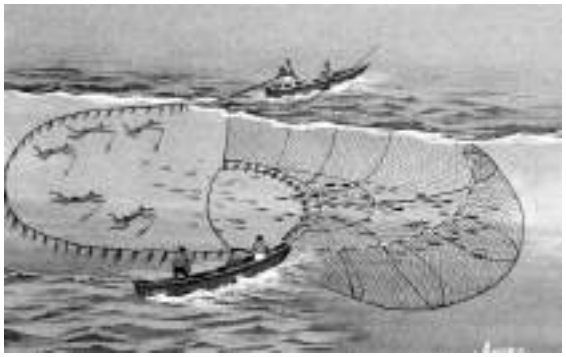
やっぱし初めは相当獲れますょ、アラウミで荒らされていないから、ひと網で満船する位、沢山いました。だけど、毎日ずっと獲っているから、やっぱし減ってきますねぇ。

2､3 日では満船していたのが、あとからは 5,6 日位はかかるとか、魚は、次第次第に少なくなってきます。漁は 3 ヶ月間旧正までやって、海は休ますでしょう。また来年、尖閣列島に行けば、やっぱし最初はいっぱい獲れましたょ。3 年間行って、毎年どうでしたかって。もう、あの頃は尖閣列島行ったら、シジャーはいっぱい獲れるましたから、毎年少なくなっていた感じはしませんでしたねぇ。

本船 2 隻、スルヂナで　取り囲み　旗立てば　網に追込む

(シジャー獲り図を見せながら)　これがスルヂナ(おどし縄)といって、魚脅すスルーがこれにいっぱい下がっているねぇ。こっちが袋網。シジャー獲りは、このスルヂナで、シジャーを大きく取り囲んで、アギヤーシンカが、この袋網に追い込んで獲るやり方ですょ。

袋網は広げたら運動場位の大きさだが、スルヂナは優にその 10 倍位長さがあります。だから、スルヂナは本船を動かして引っ張って行きます。あの当時は巻き揚げ機とかはないから、また揚げる時は、皆で手繰りで揚げます。このスルヂナには、クバの葉の芯とか、白い布を吊るしていて、これが海の中で白くキラキラ光るから、シジャーはこれを見て驚くさぁ。これで驚かして、前に逃げて行くから、最後は袋網に追い込んで、獲るわけですょ(笑い)。



ダツ追込み獲り図　(「沖縄／ニライの海」より)
この図では漁師はスルシカーを手にして追込んでいるが、金城氏の場合は後方のスルヂナにくっ付き泳ぎながらダツを袋網に追込んでいくやり方である。

まず、漁場に来て、シジャーがいるのを確かめたら、遠くから本船 2 隻は 2 手に分かれて、スルヂナを真っ直ぐ引っ張りながら前進させて行きます。大きな円を描くようにして、シジャーをいっぱい取り囲みながら船を歩かして行くから。その時に袋網を乗せたサバニも 2 手に分かれて、各本船の脇に一緒に付いて行きますょ。そうして、スルヂナでシジャーをﾄﾞﾝﾄﾞﾝ囲んで行くから。もうこれでよしと決めたら、本船 1 隻に親方、漁労長が乗っているから、目印の旗とか、櫂を上げて、「はい、曲げなさい」と、皆に合図します。

そしたら、急いで、サバニシンカは袋網を準備し、アギヤーシンカは、いよいよ追込みですょ。本船 2 隻は、急いで反対に向きを変え、袋網が入れられるように、両方からスルヂナを狭めて、丸く曲げて行きます。網舟と脇舟のサバニ 2 隻はくっ付いて袋網を出して、1 つ

に繋いで網入れたら、サバニシンカは皆で引っ張って網を広げて行く。その時には、ウチらアギヤーシンカは、急いで海に飛び込んで、スルヂナにくっ付いて、そのまま一緒に泳ぎながら、シジャーを、この袋網に追込んで行きます。

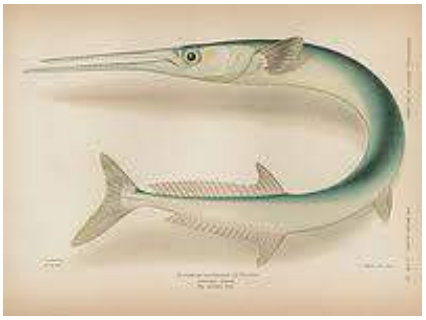
あの時は、今みたいなウエットスーツもなくて、潜るから、皆ミーカガン(水中眼鏡)して、あとはパンツ一枚で裸ですょ(笑い)。尖閣列島の海は大変寒かったですねぇ。もうブルブル震えて、シジャー獲りは、旧 11 月から 12 月、真冬の時期のワザ(仕事)だったから。

追込んだら、袋網急いで揚げる　突っ込まれる危険も

そうです。漁労長が旗揚げたら、ウチ達アギヤーシンカは、スルヂナにくっ付いて泳ぎながら、サバニシンカが仕掛けた袋網に、シジャーをﾄﾞﾝﾄﾞﾝ追込んで行きます。サバニシンカも、袋網からシジャーが逃げないよう、ロープを引っ張って網を締めているさぁ。(シジャー獲り図を指して)、これがその時の図ですょ。実際はサバニに 7､8 名が乗って、全員でロープを引っ張るんだけど。ウチ達は、追込みしていて、本船のシンカがスルヂナを手繰っているが、それが本船に真っ直ぐに並んだら、もう追込みは終わりですょ。

もうシジャーは、袋網の底まで丸くして沢山入っているから、すぐに、網を揚げに行く。早く揚げないと、シジャーがこの上から逃げたり、また引き返してきたりするから。

急いで潜って、網の底に、下にオモリが付いているから、皆で揚げる。サバニシンカは舟の上から引いて揚げて、本船に乗っている人も、皆海に下りて、網は下から急いで持ち揚げます。もう、これを皆で早く揚げないと、シジャーが戻ったり、こっちに向って来るから危険です。



尖閣で多く獲れたマーシジャー(おきざより)、嘴が鋭く突っ込まれると危険。

シジャー獲りは、間違えると危険なことが多いですょ。旗立って、スルヂナにくっ付いて泳いで、魚を網に追込んでいく時に、ここに少し尖がった曲いがあったら、シジャーはすぐそこに突っ込んでくる。

だからこの時が一番危険。きれいに丸くなっていたら、そこを回って行って、また帰るから大丈夫だけど。

引っ張る時、スルヂナが変な曲いになったら、すぐそこに飛び込んでくる。また、泳ぎながら追込んで行く時に、傍の人が速く前に進んで、一方が遅れてしまうと、後列の人の側に、シジャーが飛んで来る。その時は早くここから退かんと、シジャーに刺される、これも危なかった(笑い)。

3 ヵ年　事故 1 回だけ　シジャーに足刺されて　怪我

ウチは 3 ヵ年やって、尖閣列島では大きな事故はないが、1 回だけ、袋網から、シジャーを運搬用のサバニに乗せる時、誤って嘴が足に突き刺さって、ここをホガされて(穴開けられて)、もう血がブトゥブトゥ噴出した(笑い)。痛くて歩けんし、もう急いで抜かんといかん、だけどあれが突き刺さったら簡単には抜けん。棘は小さいが針の返しがあるから。こんな怪

我ですんだけど、シジャーが飛んできて、突かれたことは一度もなかったですょ。

常時は見えない　どこに縄入れるか　漁労長の判断

尖閣列島では、シジャーは沢山獲れましたょ。沢山獲れるからといって、あっちに行っても、群れているのは見えませんょ、何にも見えないから。もういても、いなくても、漁労長の責任で、漁はやりますから、ここならシジャーはいるから、「はい、スルヂナ入れなさい、(袋)網入れなさい」と、やりますから(笑い)。シジヤーは潮によって、いい潮の時はいなくても、すぐに大量に寄ってきます。カツオなんかとは違う、カツオはその上を鳥が飛んでいるのを見て、鳥巻き見たら、すぐそのあと追って行くけど、シジャーは見ても見えない、もう漁労長の勘１つで(笑い)。この辺をやっていたら１回で終わりにするとか、また２回やるとか、3 回も同じ所いるはずだからと、潮の流れによって、シジャーがこっちに付くか、付かないかは分かりますょ。今いっぱい獲っても、次縄入れる時は、潮が悪くて何も入らん時もありますから、潮関係で、だから、糸満では、シジャーも、トブー(トビウオ)も「潮の子」と呼んでいますょ。尖閣列島でも、あんまり沢山獲れなくても、しょちゅう同じ所ばっかし、いてもいなくても、一応仕掛けはしておいて、漁労長の、親方の判断１つで、やりますから(笑い)。漁労長は、ブリッジの上に坐って、潮の流れを見て、向こうは付きそうな流れだから、スルヂナを入れて、取り囲んでいけば、シジャーが段々集まって来て、もう尻尾で潮をポチャポチャとやるから、ではいつ合図の旗を、櫂を上げようかと待ってますょ(笑い)。

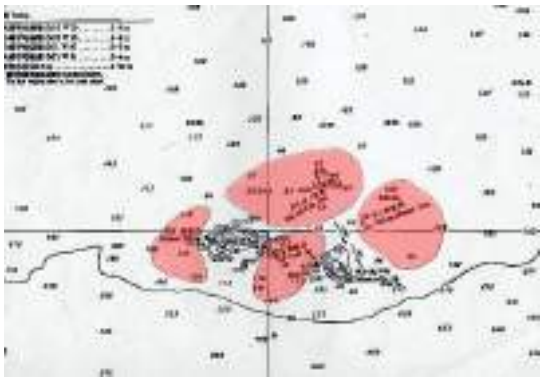
水平線上の左に南･北小島がうっすら、右に魚釣島が見える。この合い中がシジャーの好漁場。(上原博輝 2012)

クバシマ　飛び瀬、北の小岩で　網入れた、１日７回位

だけど、シジャーが来なければ、漁労長は皆に怒られるけど(笑い)。でも、尖閣列島行ったら、もういっぱい獲りましたょ、毎回満船していましたから。しょっちゅう同じ所でしたょ。(海図を指して)、この一帯がシジャーの通り道だから、もう何回も、何回も網入れてねぇ。これが、クバシマ(魚釣島)だねぇ、トィジーグワー(南小島の意)とクバシマ、こっちがユクン(久場島)、このユクンでもやったが、たまにしか、ユクンはイユ(魚)イキラサヌヨー(少ないょ)。クバシマとトィジーグワー一帯が多い。

このトリシマの後ろに、ここにシーグワー(岩っ子)の尖がりがある。水面から 1､2 ﾒｰﾄﾙ突き出て、波がゴーゴーするサンゴ礁の小さな岩が 2 つ位あるょ。こっちが北の小岩(沖の北岩)、これが南岩(沖の南岩)となっているねぇ。これがそうかもしれん、ここにも多くいるょ。こっちが飛瀬でだねぇ。だからウチらが行った時は、シジャー網は、この近辺に多く入れよ

った。この端っこから引っ張ってきて、この辺に、これに入れたり、こっちに入れたりして、両方に入れて、また網はこの辺から引っ張ってきて、あれに曲げたり、こっちに曲げたりして、あとはクバシマ近辺が多かった。網は、大体1日7回位入れたかなぁ、スルヂナ入れて、大体半時間位経ったら曲げよったと思う。あの時は時計持っていなかったからよく分からんけど(笑い)。冬だったから日は短い、相当早く揚げないと7回はできない。魚いる場合といない場合があるから、いない場合は、揚げるのも早かった。



シジャーの漁場。大体が魚釣島、南・北小島、沖の南岩沖の北岩、飛瀬付近とほぼ決まっていた。

人食いサメに遭い　スルヂナに包まり　助かった

追込みアギャーしていたら、下にサメが来る時がありますょ。たまには人食いサメも見ます。もう襲ってきたら危険だから、その時は、大抵、スルシカー(脅し縄)を、自分の身体に寄せたら、サメは寄ってこない。このスルシカーというのは、縄の下に3斤位のチエーンを下げて、このクバの新芽、白い部分の芯を4つか5つ付けて、あれが白くて、キラキラ光るから、驚いて逃げて行きますょ(笑い)。それに下に吊るしたチェーンで地面をガラン、ガランしながら、音でもびっくりさせる。だから深い所にいる魚を、下から上に揚げるから、アギャーというけど(笑い)。

シジャーとかトブー(トビウオ)獲りは、このスルシカーは使わない、縄にクバの芯とか、白い布とか付けたスルヂナを使う。漁労長が「はい、縄曲げなさい」と旗立てたら、皆海に下りて、スルヂナにくっ付いて、一緒に泳ぎながら、魚追い込んで行くさぁ。

この時、ウチも追込んでいたら、傍から何か黒いのがスーッと通り去ったから、おゃ何だろうと、後ろ振り返って見たら、もうサメが後ろにいたですょ。15㍍位後ろに止まったまま、じっとこっちを見ている。横に縞綾がある人食いザメ、あのイッチョウサバがじっとこっち見ているさぁ(笑い)。「ハンマョー(感嘆詞)！！」、ナー(もう)ドゥマンギャーニ(動転して)、傍にあったスルヂナを慌てて引き寄せて、手も、足も、これで身体を巻いたょ(笑い)、もうウチはスルーに包まっているから、海の中で揺れて、白くキラキラ光っている。これ見てサメは、もう怖がって、すぐ逃げて行きました。スルヂナに包まったお陰で助かった。あの時は、船止めて、船シンカがスルヂナを手繰っていたから、自分の力で引き寄せられたが、船のエンジンで引っ張っている時だったら、全然手では寄せきれない。だから、ウチはあの時は運がよかったですょ。

事故ですか、ウチ達は、3年間、尖閣列島にシジャー獲りに行って、あっちで人食いザメに食われたとか、怪我で人が亡くなったとかは一度もなかったです。

3ヶ月　船上で生活　合羽被って　デッキで眠る

ウチ達、アギヤーの仕事は、この仕事が終わるまで、ずっと尖閣列島ですょ。あっちで、船の上でずっと生活していましたから、船の上で3ヶ月間も(笑い)、もう仕方ないです。

あの当時はあんなにしないと食べていけなかったから(笑い)。アギヤーシンカは、皆こんな生活、宮古の八重ビシなんかに行った時も、1回は佐良浜に着けて、そこから出たら、仕事が終わるまで3ヶ月間、ずっと八重ビシで、船の上で、生活してましたから。

尖閣列島でも皆同じ、魚運ぶ運搬船は、こっちと糸満を航海して、食料とか、飲み水とか、燃料とかを運んできたり、時々は油味噌とか、黒砂糖とか持ってきましたが、これがまた楽しみだったですょ(笑い)。船の上での生活といっても、全部部屋には入らんから、上の人とか、先輩達は部屋に寝ていて、もう、ウチらみたいな若者は、デッキの上で寝起きです。雨降りの時は、合羽被って、廊下とか、網の上で眠っているんですょ。炊事場とか、あっちこっちでもねぇ。運搬船が航海している間、仕事しない、こっちの船に氷積んでいたらワザ(業、仕事)できるが、氷積んでないし、魚腐らすからできん。だから、運搬船が氷積んでくるまでは、皆チャーユクイ(ずっと休憩)ですょ(笑い)。

クバシマ　ヘビいるから　上がらない　山頂に旗竿の竹

運搬船が行って戻ってくるのは、大体1週間から10日位かなぁ、それまではチャーアシビ(ずっと遊び)。その時、ウチはあんまり島に上がらなかった。クバシマに上がった時、あっちに昔のカツオ工場があった、石垣で屋敷は囲まれていたから、また前の方には、小さな港が造られていて、クリ舟が入る位の港がありますょ。これを見て、少し山に上がろうとしていたら、黒いヘビ、トカラーといって、これ位大きなヘビがいて、2ﾒｰﾄﾙ位はあると先輩達が話していた。ウチはもうヘビは苦手で、怖いから、山には上がらなかったですょ(笑い)。このクバシマの山の上に、竹がねぇ、今浮き流しフェナー(底立延縄)で旗竿に使っているあんな竹が沢山生えてある。先輩達が上等な竹だからといって、沢山採ってきていたから、この山の上に竹があるかと聞いたら、あぁマンドーンドー(沢山あるょ)と言っていたさぁ。長い竹でなかったから釣り竿にはどうかと思う。だけどウチは山に上がって見ていない。採って来たのを見ただけだから分からん。

尖閣諸島にいるシュウダ　(新納義馬 1979)

水がなくなったら、トィジーグワー(南小島)から汲んできましたょ、クバシマに上等な湧き水や川もあったがウチらは分からなかった。あの時は、仕事終えたら、夜はトィジーグワーの傍に、南側にアンカーかけて、眠りに来ていたから、水汲みは、このトィジーグワーしか行かなかったです。昔造ったタンクがあって、そこから水汲んできて飲みました。鳥糞臭

いか分からんが、これしか水はないから飲みましたょ(笑い)。

ウチはこっちの山にも上がらなかった。ヘビがいたらもう大変だから(笑い)。山に上がって、鳥捕ったり、卵採ったりする人もいました。

台湾船、糸満の人から教わり　シジャー獲りに

尖閣列島は、潮の流れが北東に速い、その時に北風なったら、波がこんなに高くなるから、そんな場合は仕事休みます。この辺でも同じですょ、ヒーソー(引潮)に南に潮が流れていく時に、南風がバァーバァー吹いたら、逆風みたいな格好で、もう潮と風とぶつかりあって、波が大きくなりますょ。波が高くて、仕事できないと、すぐクバシマの島陰に避難しました。避難しに来た船ですか。自分の相棒の船しか見ていない、あの時は終戦から 10 年ですから、他所の船はあんまり見たことなかった。1 回は台湾船に糸満の人達が乗っていた。台湾船は突船じゃない、シジャー獲りで来ていた。

ジョーガニクヌヤー(上兼久屋)の大城いさむアッピーター(兄貴達)が、台湾人にシジャートェー(獲り)を教えて、一緒に乗って来ていたんですょ。兄貴達とは知り合いだから、もうお互いに喜んでねぇ、船に必ず来いというから行ったょ。行ったらご飯出してくれた。あの時は、こっちはウムニー(芋煮)だから、船に米を積んでいてもなかなか食べられなかった、これもお粥みたいにしか。だから白いご飯を出された時は、もうご馳走だからと喜んで食べた。だけど食べたら、砂糖沢山入れた砂糖ご飯だょ(笑い)、これは自分達には、もう甘すぎて、とても食べられないからと、食べなかった。そしたら新たに白いご飯炊いて、食べさせてくれていたょ(笑い)。

向かって来ると　一目散に逃げて　全然獲れない

台湾船は、シジャー獲り来ていたというから 2 隻いたかもしれん。サバニも積んでやり方教えていたかも分からん。ウチなんか船は離れていますから、ただサバニを漕いで遊びに行って、ご飯食べて帰って来ただけだから。実際やっているのは見てない。だけど、ジョーガニクのアッピー達が言うには、全然獲りきれないって(笑い)、「ワッターナー(俺達はもう)、イチヤーカイ(いつになったら家に)、ケーイガスラ(帰えれるのか)　ムルワカラン(全く分からない)」と言っておったょ(笑い)。ウンターガスルムンヌ(これ達〔台湾人〕がやるのは)、シジャーが来たら、もう突かれると思って(笑い)、網ンムドヤーニ(網も何も放り投げて)、ナームルヒンギェー(もう皆逃げるばっかり)、ヒンギェーシ(逃げて去って)、ムルウドルカーニョ(皆驚いてからょ)。だから全然獲りきれないって(笑い)。それに台湾人はあまり潜りはできんはずょ。アギヤーシンカは相当いないといかんが、あれはどうしていたかなぁ、台湾船に糸満の人は 4、5 人しか乗ってなかったようだが、あれも教えていたのかなぁ、どうして指導していたか、それは分からない。あのジョガニクーの大城いさむアッピーは 2、3 年前に亡くなった。生きていたらもう 94、5 になったいたはず。元気な時に、あの時のことをちゃんと聞いておけばよかった。

3ヵ年行って配当　小遣い程度　ご飯食べれたらいい

尖閣列島に3ヵ年行って、相当配当貰いましたかって、いや、貰いませんょ(笑い)。こんな団体事業は、個人は10分の1ですょ、あのトモヌイ(網元)が、アギヤー網出したり、船出して、自分で3儲け4儲け取りますから、この袋網の儲け、船の儲け入れたら、やがて、親方で7､8儲け取りますから、ウチらシンカの、船員の儲けは、僅かしか残らない。

ウチなんかは1人前といっても、配当は小遣い銭程度でしたょ。飲めば一晩でなくなりよったから(笑い)。アギヤーシンカは、全部親方へのグークー(奉公)ですから(笑い)。

だけど、あの当時は、量は沢山とったけど、儲けはそんなになかったかもしれん。相当厳しかったはずだから。それに、今はいろんな仕事があるけど、あの時は追込みしかなかったから、もう何にもない時代でしょう、食べるものもないし、芋でもあまり食べなかったですょ。だから、アギヤーの仕事に行って、そこで腹いっぱいご飯食べれるだけでもいい方でした。尖閣列島に行って、船の上で3ヶ月間、生活して、合羽着てデッキで寝ていても、別に大変とも、苦しいとも思わなかったです。こんな仕事があるだけでも有り難い、食べられるだけでも有難かったです(笑い)。あの頃は、そんなしないと食べていけなかったですから、もう皆、食べるのに、生きていくのに、一生懸命でしたから。

22の歳から2ヵ年　糸満サバ船　乗る

サバ船乗った時は22、シジャー獲りして少し遊んでから、サバ船に乗った。これは姉さんの夫がサバ船歩いていたんですょ。だからあの人が辞めるといったからウチの代わり、お前乗りなさいといって、乗ったのが、上原信繁さんのサバ船に乗ったんです。

・・以下は「1－2、サバ漁業関係者」の項に掲載。

そのあと12ヵ年間　マグロ船乗って　配当70～100ﾄﾞﾙ

サバは2ヵ年位乗って、またすぐ辞めて、マグロ船に乗りました。那覇の泊にいて、与那嶺三郎さんのマグロ船、第一幸丸に12ヵ年乗ったですょ。サバ船に乗った時からは、配当はよかったです、大漁した場合は60ﾄﾞﾙ位はあったかなぁ。120ﾄﾝの船にサバをいっぱい積んで来よったから。でも、それは大漁した場合の話、普通は15日で15ﾄﾞﾙは儲けきれなかった。1ヶ月で30ﾄﾞﾙは全然儲けきれなかった。だけど、与那嶺さんのマグロ船、第一幸丸は、40ﾄﾝ位の木船、あれでは近海歩いてから。フィリッピンの東側ょ、こっちから5昼夜走らして、あの辺でマグロ延縄やっていたんです。相当大漁して、あれで八重山近海歩いても70ﾄﾞﾙから80ﾄﾞﾙ、フィリッピンに行ったら、月に100ﾄﾞﾙから落ちなかったです。

幸丸は、与那嶺さんら親方6人で株していたが、親方さん達も相当儲けたはずですょ(笑い)。もうウチらがアギャーしていた時とは、儲けは比較にならない。だけど、アギャーしていた頃は、何にもない頃だし、また、親方も、ウチらアギャーシンカも、誰も、儲けられる時代でなかったですから。　(了)

※「尖閣研究　尖閣諸島海域の漁業に関する調査報告
―沖縄県漁業関係者に対する聞き取り調査－　2012 年」（2013 年刊）
「Ⅱ聞き取り編　1 章 沖縄本島地区　糸満漁協」**より転載しました。**